

第1回WSでのみなさんの意見

あなたがみんなと共有したい、次世代へつなぎたい、生きもののつながりは何ですか？

1、「なぜ生物多様性を目指すのか」という根本問い

「地球を守ろう」というスローガンへの違和感や、「お金以外の価値尺度は何か」「守って何になるのか」という、問いがある。

2、自然とのつながりが心身の健康と幸福感を生む

山や川、鴨川、茅葺きの暮らし、庭などを通じて、心が落ち着く・体が健康になる・季節を感じられるなど、自然がウェルビーイングの基盤になっている。

3、子ども時代の体験と教育の重要性

子どもの頃の生き物との記憶が、その後の価値観を形づくる。資産運用を教えるのと同じくらい、「生き物と過ごす体験」を教育の中に組み込む必要性。

4、気候変動・環境破壊への危機感と、個人と企業のギャップ

温暖化で将来、子どもが外で遊べるのか、生き物が生き残れるのかという不安。一方で、大きく壊しているのは企業活動などの「大きな流れ」であり、そこに対して市民や個人の思いがどう影響しうるか。

5、ボランティア頼みでは続かないという「お金」の問題

生物多様性の保全や地域活動は、善意だけでは持続せず、経済的な仕組みが必要。一方で、経済価値だけでは測れないウェルビーイングや「京都らしさ」といった抽象的価値も大事だというジレンマがある。

6、京都らしさ＝文化と自然資本の関係

醍醐寺や鴨川、漆、庭、原生林、里山など、京都の文化は自然資本によって支えられている。ただし、山の荒廃や里山の消失、庭師の減少など、実は自然も文化も危機的状況にある。

7、「守るべき」から「したい」へ——自発性を引き出す装置づくり

「面白い・楽しい・暮らしに役立つ」接点を通じて、自然や生き物を自分ごと化する「装置」をつくりたい。

8、人と人がつながる仕組みとしての生物多様性

生き物を介して地域で人がつながること、心身のバランスを取り戻すこと、ヒューマンサイズの営みを続けることが望まれている。その象徴として、鴨川や里山のような「間の場」の価値。

9、キュレーターがたくさんいる街へ

京都の街を舞台にしたミュージアムなら、いっそキュレーターも街に点在し、生物多様性に気づいていける京都へ。

ウェルビーイングとしての価値を

自発性を引き出す仕組みを

様々な領域にキュレーターを

第1回WSでのみなさんの意見

ミュージアムがどのようなものであれば、みなさんの活動や想いを後押しできますか？

1. 生き物に関心がない人にも届く“多様な入口”をつくる

- 「生き物＝守るもの」という固定観念から解放し、食・文化・暮らしなど誰もが日常で関わる切り口を増やす。
- 生き物が好きでなくても惹かれるコンテンツ（食・京野菜・菌類・工芸・漆など）を提示する。
- 研究者やキュレーターによる「解釈の翻訳」や質問コーナー、オンライン講座があると入りやすい。

2. 多様な人が自然と出会える“体験の場”を整える

- 触れる・試す・比べる——実物体験・フィールド体験・企画展などを定期的に更新し、飽きない仕組み。
- 「ほんまもん」に触れる機会（標本の美しさ、工芸体験、茅葺きと周辺の自然体験など）。
- 子どもには圧倒的に体験を、大人には体験の先へ進む“きっかけ”や深める動線が必要。
- 給食・金継ぎ・コンポストなど、学校と連携した“生活まろごと自然に触れる教育”も強いニーズ。

3. 専門家から初心者までが集い、互いに刺激し合える“交流拠点”

- 行政が“やらせる”のではなく、「やってみたい！」から始まる自発的な集まりを生む場であること。
- マニアにも初心者にも道があり、必要に応じて専門層限定の深掘りコンテンツ（非公開ゾーンなど）もあると良い。
- 茅葺きをハブにしたように、食・工芸・自然体験など“活動の輪が広がる仕組み”が求められる。

4. 見るだけで終わらず“気づき、考える”ミュージアムへ

- 展示は「観覧」ではなく、気づきの分岐点となる装置として機能する必要がある。
- 健康、食、水、安全など生活と直結するテーマを入り口に、生物多様性の意味を実感できるようにする。
- 外来生物や里山の現状など、光だけでなく影もきちんと扱うことで現実への問いを促す。

5. 情報発信とデザインの質を高め、誰もがアクセスできる場所にする

- 多言語対応や、視認性が高くつながりを可視化するデザインが必要。
- 若い世代にリーチできるビジュアル・ストーリーテリング。
- 点在する活動や知識をWeb上でつなげる“可視化プラットフォーム”としての機能。

6. 多様な世代・環境に合わせた参加しやすい仕組み

- 世帯・年齢・生活環境で接点異なるため、入門しやすい“複数の入口”が必要。
- 子どもを経由すると大人も入りやすいという声も多い。
- 体験だけでなく、衝動を掻き立てる“次の一步”の道筋が重要。

食・水など暮らしに近い入口を

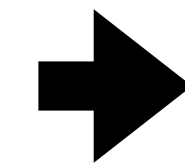
実物・フィールド・展示など体験を

関係性を可視化するデザインを

第1回WSでのみなさんの意見　まとめ

1. 多様な人が「たのしむ」ことのできる“入口”　：生き物に興味がない層、若者、海外の人など、関心や文化が異なる人々に届く入口設計。

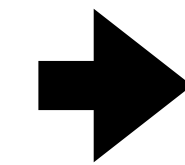
- 生き物に興味がない人は入りにくい → 「食」「暮らし」など別の切り口を。
- 多言語対応・デザイン性が弱く、海外・若者に届きにくい。
- 「生き物＝守るもの」という固定概念が障壁に。



食・水など暮らし起点の入口

2. 生態系・文化・暮らしの“つながりがみえる”　：生態系の現状や、文化・工芸・食・水・健康との連鎖の可視化。

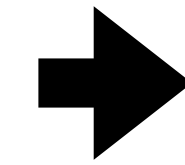
- 外来種や山の荒廃など“負の側面”も含めたりアルが伝わりづらい。
- 庭文化・漆・京野菜・工芸など、自然資本と文化の関係が理解されにくい。
- 「すでにコンテンツはある」を、体験化できるキュレーターをいろいろな領域に。



つながりを可視化するデザイン

3. 見て終わりではなく“体験が連鎖する仕組み”　：体験は重要だが、参加後に行動が続くような“次の一歩”の道筋。

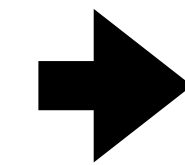
- 子どもは体験が大事、大人は体験の先へ進む導線が必要。
- 茅葺き体験 × キャンプのように継続する仕掛けをどう増やすか。
- 学校給食・金継ぎ・コンポストなど“生活に入り込む”体験の提案。



キュレーターが増える仕組み

4. 参加しやすい“交流・コミュニティ”　：興味の程度や家庭環境、年齢による参加ハードルを下げ、交流できること。

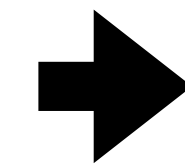
- 一人暮らし・忙しい層・子どもなし世帯は入りづらい。
- 行政主導の箱物は“やらされ感”が出て自発性が生まれない。
- 研究者との対話や気軽に質問できる環境は好評。



楽しそう参加できる多様な入口

5. 持続可能な運営（経済・発信・ブランド）　：ミュージアムの存在意義の定着に向けた動き。

- 経済価値以外に価値を語ることができないか？
- 「ボランティアでは持続しない」という問題意識。
- 継続するにはブランド価値と発信力が必要。
- 若者に届くデザイン、海外に伝わる多言語化の必要性。



新たな価値訴求点の開発